

【寄稿】 奥田元知事回想4選不出馬の本音発言に興奮

小野, 博人
元西日本新聞社

大西, 直人
元西日本新聞社

<https://doi.org/10.15017/7236790>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 13, pp.108-112, 2024-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学
文書館内)
バージョン：
権利関係：



【寄稿】

奥田元知事回想 4 選不出馬の本音発言に興奮

小野 博人

1993 年の年末も押し迫ったころ、私は福岡県政記者クラブに所属する西日本新聞社のキャップという立場にあった。私には翌 94 年 1 月 1 日付朝刊紙面を福岡県政に関する特ダネで飾りたいという強い思いがあった。それは福岡市に本社を置く地元紙としてのメンツみたいなものだった。そして、狙いを定めたのが福岡県知事として 3 期目の終盤に差し掛かった奥田八二氏の動向だった。95 年春の次期知事選を控え、奥田氏が 4 期目を目指すのか、それとも 3 期で退任するのか。北海道の横路孝弘知事とともに革新知事の灯をともし続けた 73 歳の奥田知事の去就は大きな焦点だった。当時、奥田県政を支えてきた旧社会党には奥田氏に代わる候補が見当たらず、旧社会党をはじめとする革新陣営には暗黙のうちに続投のムードも漂いつつあった。

そのころ、世の中には首長の多選に対する批判が広がりを見せていた。盤石な基盤を誇っていた多選首長が選挙で敗北し退任に追い込まれる事態が各地で生じていた。私の前任地の佐賀県でも香月熊雄知事が 4 選を目指し出馬宣言をしたものの、結局は断念に追い込まれた。香月氏は「米づくり日本一運動」を主導したことでも知られ、保守王国をバックに選挙を勝ち続けたものの、水面下で佐賀県議を中心として井本勇副知事を擁立する動きが進行、私の取材では完全に外堀を埋められた状態だった。私は、香月知事がまだ態度を表明していない時期に直接会って「4 選出馬は慎重にされた方がいいのではないか」と忠告したことがある。だが、香月氏は不満顔だった。そして 1 か月もたたず出馬表明したが、最終的には断念せざるを得なかった。保革を問わず香月氏の 4 選出馬には多選批判という大きな「壁」が立ちはだかっていたように思う。

そうした佐賀県での取材経験もあり、福岡県政の担当となった私には、奥田知事が果たして多選批判を受けてまで立候補するだろうか、との素朴な疑問があった。もし次期知事選で敗れでもしたら、学者知事の晩節を汚すことにもなりかねない。私には知識人の奥田さんだったら、4 選出馬はしないかもしれないという予感めいたものが生まれていた。

こうした中で、私は「元日の特ダネとして、奥田さんの次期知事選への対応に関する記事を掲載する」と心に誓っていた。むしろ、心に決めることで自分を追い込み、駆り立てていた。

メディア各社とともに奥田氏の意向を探ろうとしていたが、当時、県政の陰の実力者だった林武彦社会党県議団長の意向もあってか、県庁秘書室が奥田知事のインタビュー取材に門

を閉ざしていた。奥田氏に接触する機会がなかなか見つからない状況だった。

そこで、私は取材を通じて親交を深めていた林団長の事務所に足を運び、「何としても奥田さんの考えを聞きたい。年末のあいさつということで 10 分だけ会わせてほしい」と直談判。林団長は「分かった」と OK を出し、その場で秘書室に面会の日程を入れるよう電話してくれた。林団長にも「知事の腹はどうなのですか」と聞くと「奥さんが（4 選出馬には）反対しているようだ」と漏らした。「これは不出馬も十分、あり得る」と考えた。

奥田知事への取材は、年末の仕事納めも迫った 12 月 27 日だったと記憶する。秘書室は「予定が詰まっているので 10 分だけです」と念を押してきた。私は「あいさつですから」とかわし、秘書室長同席の上で、奥田知事に会った。

あいさつということでメモもとらず、雑談を続けた。奥田知事の本音を引き出すために、警戒心を解かなくてはならなかった。20 分ぐらい経っただろうか、秘書室長が「そろそろお時間ですから」と耳元でささやく。「これが最後」と断ったうえで、質問を変えた。

「来年はいよいよ、知事選が焦点になりますが、4 選出馬を求められたら、立候補されるご意思はありますか」と水を向けた。奥田氏は「いや、もう体力がないよ。知事の仕事は激職で、心身を削るものだと思う。余力があるうちに他の仕事がしたいね」とあっさり本音を打ち明けた。奥田氏が不出馬に傾いていることを示すいきなりの発言だ。私は驚いた。さらに「このところ、首長の 4 選は多選との批判が出ていますが、知事はどう思われますか」と質問すると、奥田氏は「私も多選だと思う」と言い切った。「家族もずっと反対している」と付け加えた。

もちろん奥田氏本人に 4 選出馬の意思がなくても、革新陣営が強引に担ぎ出すこともあり得るのではないかと、この思いから、「（革新県政を守るためにも）後援会などが出馬を求めてくることもあるのではありませんか」と尋ねると、「そうなると困ってしまう」とぼつり。ただ、知事退任の意思は固いようで、不出馬の正式表明時期を質問すると「来年の 2 月県議会あたりで聞かれるかもしれないが、どう答えるか。いずれにしても 6 月県議会あたりできちんとしなさいといけない」と語った。その断固とした表情と口調。名目はあいさつとはいえ、インタビュー取材に知事が 4 選不出馬の考えを表明した形であることは間違いない。「これで書ける」と胸が高まった。

知事にあいさつをし、秘書室長に私の心中を悟られないように何気ない顔をして知事室を出たつもりだったが、興奮して上気していたと思う。すぐさま近くのトイレに飛び込み、知事とのやり取りの詳細を忘れないようにメモに記した。その足で、林団長に面会。「知事は次は出馬しないと声明しました。これを元日の記事にしますから」と伝え、林団長は「そうか。自分は聞かなかったことにする」と答えた。暗黙の了解の意を示したと判断した。林団長も奥田知事の意向は分かっていたと思う。

94 年 1 月 1 日付西日本新聞朝刊 1 面トップで、6 段抜きの「奥田知事 4 選不出馬へ」の大見出しとともに「保革対決の県政は『五五年体制』の崩壊とともに大きな転換期を迎え

た」と指摘した記事が掲載されると、旧社会党をはじめ革新陣営に衝撃が走り、その日のうちに緊急会合が持たれた。以降、関係者が協議を重ねた結果、奥田氏退任の流れが決まった。林団長から「西日本新聞の記事で党内の流れができた。かえって良かったよ」と言われたことを鮮明に思い出す。奥田知事は1月4日の年頭記者会見でも四選不出馬の意向を示した。そして本人の予想よりは少し遅れたが、94年9月の県議会で不出馬を正式表明した。ちなみにわが家の表札は奥田知事に揮毫^{きごう}していただいたものである。

(1993年5月から4年間、福岡県政記者クラブの西日本新聞キャップ)

【奥田日記の主な関連部分を抜粋・再掲】

●1993年12月27日 3年連用日記

十一時から西日本新聞社小野記者との懇談を一時間、次の知事選は？という問いも出た。

●1994年1月年頭所感 随想日記

私の四選不出馬の表明も西日本新聞の小野記者に言った事が元旦のトップ記事になってしまったのだが、私にとっては「疲れ」もあるが、もう頼りになる力も核もなくなっているから遂^ひい言ってしまった事なのである。自分の将来展望ももてないのである。

●94年1月4日 随想日記 「四選出馬への意見」

初の記者会見で、記者は私の四選出馬への考えについて質問を集中してきて、一月一日の西日本新聞のトップ記事で「出馬したくない」と私が発言したことが注目されていることが事実化したわけ。新聞記事と同様のことを答えたが、NHKは全国放送で流した。民放ではいやがらせを交えて放送したらしい。一部の人は「さて、どう対応するか」と反応したろうし、他の人は「やめてくれてはいかん」と感じたようだ。いずれにせよ、私は聞かれたら辞退する姿勢で対応するが、多くの人がどう対応するかで、私は今の気持を固執するつもりはないと言ったままである

●94年1月6日 随想日記 「四選不出馬発言の波紋（一）」

「四選不出馬」発言をめぐって三役会議で家庭でもかなり論議されたが納得できぬまでであった。発言のタイミングが早すぎたこと、不穏当な部分があった事は認めるが、嫌われるようなことを言ったし攪乱^{かくらん}的発言について非難が集まった。そして、好きで知事をしているとか、公務に追われ私的時間がないとか、人々が多忙なのは当たり前と思っている点など、私には反撥が残ったままだった。私は私的時間が少いことを一番苦にしているが、好きでやっている限り当たり前だから忍ぶしかないと押しつけられる意見には最後まで抵抗を感じてい

る。努力していると思っているのに「何もしてない」という人は少ない。腹立たしい限りである。

●94 年 1 月 7 日 随想日記 「四選不出馬発言の波紋（二）」

新年挨拶まわりもこれで三日目。労組系を残して大体終わったが、話題は私の四選不出馬表明と不況に集中したといえる。四選不出馬については殆んどが歓迎の空気である。もちろん、意思表示が早すぎた嫌いのあるとの意見が同様に出た。もう厭きたという腹の底も見えている。自民党あたりでは急に忙しくなってきたともいう。社会党は対応にきりきりまい（大会の準備の必要はもちろん）のようで幹部は一人もいなかった。西日本新聞は「してやったり」の気分がみえみえ。

●94 年 1 月 13 日 随想日記 「次の候補者探しを」

県政推進会の懇談会が開かれ、県側の三役も参加した。例の、私の四選不出馬が当然問題にされた。〔中略〕誰しも四選は望んでいない事は明らかに感じ取れるが、攻める気持は共通しているように思える。ただし、次なる候補を選ぶのに誰も確信がないようである。私は早目に一石を投じないといけないと思ったし、このことを他人に相談すべきでないと思ったから、事が面倒になったわけである。〔中略〕誰にきいても〔不出馬は〕当然というが、他に候補が見つからないとなると続投論にかわってくる。ざっといって以上の如きが現段階の知事選観である。私はみんな早く候補者探しをはじめてほしい。

●94 年 1 月予記 3 年連用日記

年末二十八日に西日本新聞の記者に語り、一月四日の記者会見でも語った私の「四選不出馬」問題が身边で終始問題にされたこの一月であった。西日本新聞は社の希望する方向でこの話題を活字にした。私に出馬してほしくないという気持が、出馬しないと言っていると読めるように念入りに報道している。一月一日朝刊トップに書き、その後二回ほどその方向で書き、さらに県議会決算委員会でも「知事保留」で質問された。私の言葉づかいも悪かったと思うし、誰にも相談せずと言ったので周辺に大いに迷惑をかけることになってしまった。

●94 年補遺 随想日記

十一月二十七日。大忙しで走り回った二ヵ月だった。次期選挙の知事候補は通産省高官 OB の麻生氏にほぼ決ったようだ。自民、連合福岡、社会、それに公明も相乗りする動きほぼ固まった。社会党はイニシアティブを失うことになろう。どの党とはいいい難い。どの党も次の段階で変貌する見込みだからである。中央で社会党の解体も云々され、村山首相は待ってくれといっている。「残り自民党」が一番確かで大きいように見える。戦後 50 年。こんな混沌政局は初経験である。近頃、新聞を精読する気にならない。マスコミ嫌いのせいもあるが、

混迷政局、つづめていえば年をとったせいともいえよう。楽になってぼんやりしていたい。

(大西直人・選)